

可良須等布於保乎曾杼里能

渡
部
和
雄

—

三五二一 可良須等布於保乎曾杼里能麻左佅尔母伎麻左奴伎美乎許呂久等曾奈久
という歌の訓み下しについて例をあげる。

『古典文学全集 万葉集』

鴉とふ大軽率鳥の眞実にも来まさぬ君を児ろ来とそ鳴く

ヲソは軽率

『新編 古典文学全集 万葉集』

鳥とふ大をそ鳥のまさでにも来まさぬ君をころくとそ鳴く

大ヲソは、大變な慌て者、ひどいそそつかし屋、の意

—

『万葉集東歌・防人歌』『全注』（水島義治）

鳥とふ大輕率鳥の眞実にも来まさぬ君を児ろ来とぞ鳴く

『万葉集 全訳注』（中西進）

鳥とふ大をそ鳥の眞実にも来まさぬ君を児ろ来とぞ鳴く

大変なあわてものの鳥

『角川文庫 万葉集』（伊藤博）

鳥とふ大をそ鳥のまさでにも来まさぬ君をころくとぞ鳴く

ころく「自来」の意か。

『集成』

訓みは右と同じであるが、

ころく 鳥の声。「子ろ来」「自来」などの意に聞きなしたものの。

という頭注がある。

『東歌疏』

鴉とふ大嘘鳥のまさでにも来まさぬ君をころくとぞ鳴く

○をそは、うそに通ずる。大嘘を吐く鳥と説かれてゐるが、尚近代では、罵言の意味を含んだ語かもしれぬ。

『万葉東歌』室伏秀平

○オホヲソドリノ ヲソはウソ・虚言。大嘘鳥はむろん、歌の上での造語であらう。

それらをまとめて、後藤利雄代『東歌難歌考』は、

「オホヲソドリのヲソの解釈には、古来諸説がある。「おそといふ詞は、恐ろしきといふ心と、きたなしといふ心とにかよへり」(長流・管見)、「おほをそは大食也。そとし同音也。鳥よく物くふ故、おほをそ鳥と云」(季吟・拾穂抄)、「おそきは東の語にきたなきをいへば、大にきたなき鳥といふ心に名付たり。書にも貪鳥といひて心貪欲に非常なる物にいひならはしたり」(契沖・代匠記)、「大うそ鳥と云義也」(春満・童蒙抄ほか)などである。これらのうち、ヲソをウソ(嘘)と解するのが、ヲ・ウ相通の例が古語・方言に多いだけ、説得力もあり、通説とされてきた感がある。

しかし武田博士の全註釈が、

あひ見ては月も経なくに恋ふといへばヲソロと吾を念ほさむかも(六五四)

咲く花もヲソロは疎し奥手なる長き心になほしかずけり(一五四八)

などのヲソ(ロ)は「嘘」では解せないことを例証にして、ヲソを「軽率、周章の意。接尾語を添へてヲソロにもいふ」として以来、オホヲソドリも「大軽率鳥」と解するのが、最近の通説になっている。古典大系は、このヲソをワサ(早稲)の、母音交替による造語法と見て、「早稲は早熟の意味であり、早熟はヨーロッパ語でも軽率を意味するように、早合点とか、軽はずみとかを意味しうるのであろう」といつているのは、その語源にまで遡って加えた説明である。

私も、全註釈の説に同感であるが、ただ訳語としては、この歌の場合「軽率」よりも「粗忽」の方が適當と思う。

加えて後藤氏は「於曾の風流士」(一二二六)、「己が心から於曾やこの君」(一七四一)の「オソ」を、

「このオソ(遅・鈍)に対立する語が、ヲソ(粗忽・軽率)であつたとみてよい。この方がずっとわかりやすいし、

説得力にも富むといつて然るべきであらう。

といわれる。で、

「兎ろ」のコは、甲類に言うのが正しいのに、これも取り違えて乙類のコに言った。
と、結句にまで連絡されている。

『万葉集東歌の研究』（豊田八十代）

於保乎曾杵里は、大虚言鳥である。

では「ウソ」と仮名がつけられている。

昔は生活的に幅が広がった。へ恐ろしい・きたないへ大食へ貪欲などを含めてカラスを受け取っていた。地許近くの、

『万葉集東歌評釈』（中村鳥堂）には、

鳥とふ。大謫鳥の。まさでにも。来まさぬ君を。来ろくとぞ鳴く

於保乎曾杵里は大謫鳥、大うそつき鳥。

麻左氏は（二七）（一四一）に詳説せる如く、神山の草木を結んで祈願を籠むるその草木をいふ。許島久は鳥の声を「来ろく」にかけたのである。

鳥といふ大謫つき鳥が、麻左氏に祈願しても来まさぬ君を「来ろく」と鳴く、待つ人の来ないので鳥の声までが癪に障るのである。

という。東国に育った人には、いわゆる字問とは少し趣の違う受け取り方があったのであらう。「マサデ」の「テ」を木（枝条）のように受けとっている。へ正木へ、神山の草木というのであらう。

日本靈異記 中

加良須止伊布 於保乎蘇止利能 去止乎能米 止母尔止伊比天 佐岐施智伊奴留

『古典全集』

鳥といふ大をそ鳥のことをのめ共にといひて先だち去ぬる

鳥という大うそつき鳥の言葉はあてにならないが、信厳もまた言葉ばかりで、いつも死ぬ時は一緒にと行って、わしをあてにさせていたのに、先に死んでいったなあ。

と、「大うそつき鳥」と解釈されている。

上二句「鳥という大をそ鳥」は述語をとらないで、修辭として独立したようになってゐる。三・四句、または五句が述語にも見えるが、それは「鳥の」の述語というよりは信嚴の意味であろう。

いわば「鳥とふ（といふ）大をそ鳥の」はあるイメージを含んで独立して受けとられていたとみられる。

大伴宿禰駿河鷹譚三首

六五四 相見者月毛不経尔恋云者乎曾呂登吾乎於毛保寒毳

相見ては月も経なくに恋ふと言はばをそるとわれを思はさむかも

『全訳注』 軽はずみだと思ひになるだろうかなあ。

「ろ」は接尾語。「をそ」はワサと同語。

大伴坂上郎女晩芽子譚一首

一五四八 咲花毛平曾呂波厭奥手有長意尔尚不如家里

『全訳注』 咲く花もをそろはうきを晩なる長き心になほ如かずけり

花もあわてて咲くのはかえつていとわしいものを。

「をそろ」は軽はずみ。

『角川文庫 万葉集』

咲く花もをそろはいとはしおくとなる長き心になほしかずけり

軽率、ここは早咲き

「咲花も」は次の兩句にかかるとみてよいだろう。

平曾呂波厭Ⅱせつかちに咲く

奥手有Ⅱ遅く咲く

そして「長意尔」と続くところからは、先の句はへせつかちな心を示し、周到な（落ちついた）心に対するものであろう。

けいそつ、軽はずみ、あわて者などがあたつていよう。

ただ、駿河麿と坂上郎女の歌に出てくるところからみれば「ヲソロ」は大伴歌謡圏でのくだけた表現であったかも知れない。

『全訳注』のように、

咲く花もをそろはうきを／

晩なる長き心になほ如かずけり

と訓んでみると二句でちよつと止まって、へそれに対して、といったような間があつて、そのことと、「来まさぬ君を」――「コロクとそ鳴く」に似たところがあるようにも思われてくる。

石川女郎贈大伴宿禰田主歌一首

一二六 遊士跡吾者聞流乎屋戸不借吾乎還利於曾能風流士

遊士とわれは聞けるを屋戸貸さずわれを還せりおその風流士

『全訳注』 のろまな「みやびお」ですね。

「し」を伴うと形容詞「遅し」となる。鈍。

『全集』 まぬけな風流人だこと

オソは遅と同語。間抜け、愚鈍の意を表わす。

詠水江浦鳴子一首并短歌

一七四一 常世辺可住物乎劔刀已行柄於曾也是君

常世辺に住むべきものを劔刀己が心から鈍やこの君

『全訳注』 軽はずみな、とんまな。

『大系』 何と間のぬけた、思慮の浅いことか。

とまで行くと、「ヲソ」「オソ」は似てくるようににも感じられる。

さて「ヲソ」(ヲソロ)、「ウソ」(オソ)について読む人々は、

〈粗忽〉〈軽率〉〈嘘〉〈軽はずみ〉〈鈍い〉〈間抜け〉〈とんま〉

など理解してきた。

今もそうであるようにこうしたマイナスイメージは、奈良朝の人々が、同じような価値意識に育てつつあったのであろう。

それをへ鳥へにひつつけたのは、農村の部落の人であつたのか。鳥の鳴き声は、大きくて、しかも集合して、部落全体を威圧する。今でも農村での予兆、凶兆はカラスの鳴き声によっている。

そしてもう一つは、生命や自然に敏感であつた宗教的心性にうけとられた。

このマイナスイメージは都市や組織や文明のキシミのようなものだから、それは当然、農村や宗教の中に引き取られる。ボルネオの鳥人間（『修道士マウロの地図』）

いわば鳥はこうしたマイナスイメージの主宰者、魔王であり、かつ審判者でもあつた。

三

「真実にも来まさぬ君を」

『全注』 実際にはおいでになりもしないあの方

『大系』 本当においでにもならないわが君を

来まさぬ君 と

コロ来 との関係だから

それを同一対象に提えると次のように解される。

『新編古典文学全集』

ここは予言が外れたので鳥を憎みながら、わざと逆に、見事の中、よくも言うてくれたと言ったものの鳥という とんま鳥めが よくもまあ 来ない君なのに ころく—自分から来る—と鳴くわ

『集成』 まさでにも 予兆どおりにも

鳴き声どおりにおいでにもならぬあの方

『角川文庫』（伊藤氏同様）

この「まさでにも」を「予兆どおりにも」とするのは、東歌にもう一例、

一三七四 武藏野に占へ肩焼き麻左豆尔毛告らぬ君か名トに出にけり

とあるト占の歌に関係しているらしい。へマサデ—という表現はト占の性質を持つと。

ありありとお告げなどあるはずのない君の名が、

母親の占い（に）

と、二段階になる。へ予兆どおりにも—告らぬ君が名「占に出にけり」でおかしくなる。

ト占に於ては、表現（心理）の前後が対比的に把握されようとしている。

「来まさぬ君」

児ろ来（自来、比来）

というわけである。そして「大をそ鳥」の「カラス」もまたそのト占に含まれよう。人間（作者）がト占の主体になつてきている。

「ウラマサニ」(占正)と訓む例は次のようにみられる。

二五〇六 事靈八十衢夕占問占正謂妹相依

『新編全集』 言靈の八十の衢に夕占問ふ占正に告る妹相奇らむと

二五〇七 玉梓路往占占正相妹逢我謂

玉梓の道行き占の占正に妹は逢はむと我に告りつる

これらへ相寄らむへ逢はむが期待はずれになることはよくあることだったろう。それを烏が「コロク」(自ろ来)と鳴いたというわけである。

これは東国での鳥の声を「コロク」と聞くのが一般的であったということになるであろうか、と共に「コロ」が「自(コロ)」と理解される一般性もありえたということになるか、そこは難しい。

『東歌評釈』(中村烏堂)では、

来ろくとぞ鳴く

で、「来ろ」の方に意味を置いているのであろう。

「来まさぬ君」は国庁の役人、地方長官などであらう。へ来まさぬは「君」の在り様、一般性であった。

「君を」の「を」は、作者、歌う者の前に存在する相手を言っているのではないか。

三六六〇 夜並べて君を来ませとちはやぶる神の社を祈まぬ日はなし

『新編古典文学全集』 助詞トで統括された引用句の中のヲは主格ないし呼格と解してよい。

二五九四 行かぬ我を来むとか夜も門ささずあはれ我妹子待ちつつあるらむ

の「行かぬ我を」の表現も面白い。

二六〇七　しきたへの衣手離れて我を待つとあるらむ児らは面影に見ゆ
なども似ている気がする。

「阿那迦夜志　愛袁登古袁

『大系』「を」は感動の助詞。

というのは紀「哉遇可美少男焉」などに合わせていうのであろう。

鳥が鳴く東国では、そもそも鳥の声は予兆性、吉凶性として存在していたのかも知れない。

二六二四　逢はななくに夕占を問ふと幣に置くに我が衣手はまたそ継ぐべき

『新編全集』　動詞問フはヲ格をとる。

君をコロクとぞ鳴く

君を問ふ

君を……と宣る、つけている。

東歌に、

三四三二　足柄の和平可鶏山（我を掛け山？）のかづの木のをかづさねもかづさかずとも
という歌がある。

二四一五　娘子らを袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけり我は

『新編全集』　乙女に向つて袖を振る。

五〇一　未通女等之袖振山の瑞垣の久しき時ゆ思ひきわれは

「君を」

『大系』 本当においでにもならないわが君を、「兎ろ来」（君がおいでになった）と鳴くことよ。

『全注』 「君を」の「を」は「あなたを」と連用格助詞とすることもできるが逆接仮定条件を示す接続助詞と見る。「あ

なたなのに」。「丈夫と思へる我をかくばかりみつれにみつれ片思ひをせむ」（4・七一九）へ「大夫と思へる我」は、

二五八四 大夫と思へる我を

五 大夫と思へる我も

一三五 ”

九六八 大夫と思ひし我や

二八七五 ”

四四五八 大夫と思へるものを

同様に『大系』では、

二五八四 と思っている私を

七一九 ヲは反戻の意の助詞。立派な男子と思っている自分であるのに、

といった具合で大体は逆接にとっている。

「君を」この形のままにみれば、民話風、村落表現風はへ君のことをンコロクとぞ鳴くという具合なのであろう。

歌（表現）は君を指している。君に向き合って言っている。そこで歌は諧謔のようになる。

対してコロ（兎ろ）は自分である。普通名詞にして、一般性を言っている。いわばそこは形式的な場所である。

その場所に対して「大をそ鳥」（ひどいそそっかし屋）にうながされて自分がある。だからその場は基準のような場

である。

「きまさぬ君を」

似た表現に次のようなものがある。

二三七八 よしゑやし来まさぬ君を何せむに厭はずわれは恋ひつつ居らむ

二六一三 タトにも占にも告れる今夜だに来まさぬ君を何時とか待たむ

これは〈占〉に君が来ると出た話。

一四九八 暇無み来ざりし君に霍公鳥われかく恋ふと行きて告げこそ（不来之君）

一四九九 言繁み君は来まさず霍公鳥汝だに来鳴け朝戸開かむ

は、「来まさぬ」の理由として〈暇なみ〉〈言繁み〉をあげている。一四九九は伴四繩が「宴吟詠」。

二二九五 わが屋戸の田葛葉日にけに色づきぬ来まさぬ君は何心ぞも

一六二〇 あらたまの月立つまでに来まさねば夢にし見つつ思ひぞあがせし

など、「きまさぬ」とにかく、相手が来ない状態をいつているのは当然である。

四

〈コロク〉

一般的には『全注』に要略されているように、

「ころく」は鳥の鳴き声の擬声語であるが、それを「児ろ来」の意に聞きなして、「児る来」と掛けて言ったもので

ある。「兎ろ」のコは甲類でなければならぬのに乙類の「許」が用いられているので、「此ろ来」すなわち「此処へ来る」という解も成り立つ（全註釈）。また古典全集は「ころ臥す君」の例から「ころ」を「自ら」の意に解し、結句を「ころく——自分から来る——と鳴く」と口訳しているが、「兎」に「許」を当てた例は前にもあり（許呂勢手枕）、ここも上代特殊仮名遣の上からは違例であるが「兎ろ来」と解したい。
と理をつくしている。

『新編全集』でも、「コロク」は鳥の鳴声の擬声語」という所は同じである。

で、とにかく鳥は「コロク」（兎ろ来）という風に鳴いたのであろうか。

鳥が「コロク」という風に鳴いたのが聞こえたら「於保乎曾杼里」は要らないのではないか。

鳥が……コロクトソナク

兎ろ来とそなく

此ろ来とそなく

自来とそなく

と、全部聞こえるわけで、それで（掛詞）は成立しうる。

鳥は何とも鳴いていないのに「於保乎曾杼里」がそれを翻訳したのではないか。

『東歌疏』

ころくは、「子ろ来」とも説くが「比来^{コロク}」と見る方がよい。勿論、普通の人間の詞としては不完全だが、鴉の声をさう解釈して居た事はあるさうである。歌主は女であり、「子ろ」は男であるとすれば、「子ろ来」では、稍不安定だが、それも鴉の声ならば、さしつかへがない。この点からして「子ろ来」を否定した訳ではない。

と、ここで不思議なことに気づく。一首の歌についても、その一首の解釈には、折口氏の古代日本学の全部がかかっているのではないか、という風に思われること。

『万葉東歌』（室伏秀平）は総釈に拠っているので、

コロは日頃のコロ、クは来で、鳥の声に、頃来、すなわち、近いうちに来ると言い懸けたものであろう。

一二三 多気婆奴礼多香根者長寸妹之髪比来不見尔搔入津良武香

『全集』に「原文『比来』は漢籍の俗語的用法。「比」は「比日」などに同じ。

「このごろ見ない間に」

という。多分「このごろ」というのは、今日、話している今より、以前を言っている。

近い将来（近いうちに）という例もあるようにも思われる。

四三六 人言之繁比日玉有者手尔卷以而不恋有益雄

四八七 淡海路乃鳥籠之山有不知哉川氣乃己呂其侶波恋乍裳將有

の「けのころごろ」は、ここ何日か、といって、近日中を含むのかも知れない。「恋乍裳將有」という表現にもそれが感じられる。

五八八 白鳥能飛羽山松之待乍曾吾恋度此月比乎

六三〇 初花之可散物乎人事乃繁尔因而止息比者鴨

一四五九 世間毛常尔師不有者室戸尔有桜花乃不所比日可聞

一六〇五 高円之野辺乃秋芽子比日之曉露尔開兼可聞

一六一五 大乃浦之其長浜尔緑流浪寛公乎念此日（比日）

一七六八 石上振乃早田乃穂尔波不出心中尔恋流比日（此日）

一九一九 国栖等之春菜將採司馬乃野之數君麻思比日

二一七五 日来之秋風寒芽子之花令散白露置尔来下

二二六〇 吾妹子者衣丹有南秋風之寒比来下着益乎

二二二九 雪寒三咲者不開梅花縦比来者然而毛有金

二二六六 真十鏡見之賀登妹相可聞玉緒之絶有恋之繁比日

二四八二 水底生玉藻打靡心依恋比日

二六〇三 心乎之君尔奉跡念有者縦比来者恋乍乎將有

ここにも「將有」という語があつて、

『新編全集』真心をあなたに捧げた氣ですから、ええしばらくは、恋い慕いながらじつとしていきましょう。」
という。へしばらくは」というのは未来にもわたるといふつもりだろう。

二六〇五 玉梓之道去夫利尔不思妹乎相見而恋比鴨

二七四四 鈴寸取海部之燭火外谷不見人故恋比日

二八六〇 八釣川水底不絶行水続恋是比歳

二九六三 紅薄染衣浅尔相見之人尔恋比日可聞

二九七二 赤帛之純裏衣長欲我念君之所不見比者鴨

三〇一五 如神所聞滝之白浪乃面知君之所不見比日

三〇二二 行方無三隱有小沼乃下思尔吾曾物念頃者之間

三〇五二 垣津旗開沢生菅根之絶跡也君之无所見頃者

三〇五五 山菅之不止而公乎念可母吾心神之頃者名寸

三一〇九 慇懃憶吾妹乎人言之繁尔因而不通比日可聞

三一四四 客夜之久成者左丹頰合紐開不離恋流比日

三一四六 草枕旅之衣紐解所念鴨此年比者

以上、卷十三、東歌以前の「ころ」を見て来たが、〈頃来〉といった感じは受けとれない。〈頃来〉という云い方があったかも知れないが、仲々難しい。

東歌には（防人歌にはない）、

三五〇六 新室のこどきに到ればはだ薄穂に出し君が見えぬ此の頃

三五一一 青嶺ろにたなびく雲のいさよひに物をぞ思う年の此の頃

の二例がある。

「君が見えぬ此の頃」という表現は一つの慣用句のように使用されて三五〇六に到っていることも推測される。「年の此の頃」はまた「この年頃を」「この年頃は」などに先例がみられる。

右様な全体性からみるに東歌の「コロ」も先行歌から脱離しては使われていないようである。

『靈異記』に「即將於家交通相住比頃懷任一男子」（狐為妻令生子縁）とあつて、『全集』には「それからあまり隔たらないころの意」という。

東歌の「コロ」——コロが人である場合。

三三六一 許呂安礼比毛等久

三三六八 故呂河伊波奈久尔

三五二五 児呂我宇倍尔

三五〇九 古呂賀於曾伎能

三五三〇 児呂我可奈門欲

(三五二一 許呂久等曾奈久)

三五四一 比登豆麻古呂乎

三三六九 許呂勢多麻久良

三五三七 古呂之可奈思母

三五六五 可能古呂等

三五二二 児呂等左宿之香

三五三九 比等豆麻古呂乎

防人歌

四四三一 古侶賀波太波毛

とあつて「コ」は許、故、古、児が使われている。これらは「児ろ」と訓んでいいだろう。「コロ」に動詞が続くのは、三三六九 足柄のままの小菅の菅枕あぜかまかさむ児ろせ手枕があつて、「児ろ来」の可能性をうかがわせる。

さて「児ろ来」としてみて、この「来」にも不明様相がある。

三三八二 宇麻具多能禰呂乃佐左葉能都由志母能奴礼弓和伎奈婆汝者故布婆曾毛は、「我来なば」——我行きなば、のようにも見える。次の歌が

三三八三 馬來田の嶺ろに隠り居かくだにも国の遠かば汝か目欲りせむである。

七〇 倭尔者鳴而欵来良武呼児鳥象乃中山呼曾越奈流

一九五六 山跡庭啼而香将来霍公島汝鳴毎無人所念

○大和には鳴きてか来らむ——大和で鳴いた後、こちらへやって来たのだろうか。

この類歌七〇は吉野宮で詠んだもの。この歌も吉野での作か。(全集)

○七〇 大和では今頃は呼子鳥が鳴いて来ているだろうか。ここは大和を主とした表現。(全訳注)

「此地者 向韓国 真来通笠沙之御前」(記)

○「真来通」をマギトホリと訓むのは神武紀の「覓国行去」の訓注クニマギトホルとあり、意味こそ違え発音マギの温存が見られる。まことに道が行き通つての意。動詞にマがつく例はまれにある。(西宮一民)

『古典大系』

真来通りは求ぎ通りで、住むべき地を求めて通る意。

『朝日古典』

まっすぐにずっと通じてゐて。

『古典全集』

神代紀を引く「国寛ぎ行去りて」。この「行去」には〈行く〉が含まれているのだろう。

場所を置いてみると、

高千穂からは、まっすぐにずっと通じて（向かつて）ゐて。

笠沙の岬からは、まっすぐに来ている。

という具合になるのかも知れない。

また〈去来〉（いざ）という表現もある。

一六四六 率所沾名

三四〇九 伊射禰志米刀羅

三五一八 伊射禰之売刀良

九〇四 伊射禰余登

二一〇三 去来於野行奈

六五二 率二将宿

三九七三 伊謝見尔由加奈

四四 去来見乃山乎

一〇 去来結手名

三一七〇 去来帰奈

三七一〇 伊射遊賀武

二九三 率行見

三三四六 率和出将見

四二七七 伊射吾苑尔

この「去来」は日本紀神代「去来此云伊弉」や、例の帰去来今辞によって知られる。

「来」は「いぎ」の意味の助辞。「今」は感嘆助辞。（『陶渊明』星川清孝）という。

『大漢和』

いぎ。さあ。さらば。いぎない促す辞。元来は、来だけに此の意があるのを、我が国で誤解して、去来の二字で此の意に用ひる。来は中国南方地方の語で、楚辞などに見えてゐる。

『経伝釈詞 七』

来、句中語助也、莊子大宗仰篇、子桑戸死、孟子反・子琴張、相和而歌曰、嗟来桑戸乎、嗟来、猶嗟乎也、云云、来、句末語助也。

『孟子、離婁上』蓋帰乎来

『史記、孟嘗君伝』長鋏帰乎去

などを通してみると「去来」「来」には未来性―意志や願望が伴われていることが推量され、場所を置いてみると、此方から行く

向こうから来る

という現象が出て来そうな具合もみられる。

東歌に、

三三五七 可須美為流布時能夜麻備尔和我伎奈婆伊豆知武吉旦加伊毛我奈氣可牟
という歌があつて、「わが来なば」を、

『万葉集 東歌・防人歌』（水島義治）は、

自分が来たならば。自分の行手に霞がかかっている富士の山辺を眺めて詠んだ歌であるから「わが行きなば」とすべきであるが、富士の山辺を主として、そこに行きついた時の自分を思つて、「来なば」と言つたのである。という。

としたら「コロク」（見ろ来）は（見ろ行く）、見ろ行くと鳴いているのであるが、その見である私（作者）がその場に「行きついた時の自分を思つて」「見ろ来」と鳴いていることにもなりうる。

六

鳥が何かを掛けて鳴く例は少しある。

一八二五 紫草の根延ふ横野の春野には君をかけつつうぐひす鳴くも

『全集』では、

このカクは心にかけて思ふ意か。

『注釈』では

「かけつ、」は心にかけて、心に掛けてゐるやうな声で鳴いてゐるよ、の意。

『大系』

君を思つてウグイスが鳴く。

などである。これを理屈では面白いことが考えられよう。

君を——（かけつつ）——鳴くも

（自分（作者）が君を心にかけて

うぐひすが私の心を含んだように

右の形は実は本論の歌に似ているだろう。へうぐひすがへ私が君を思つてゐるやうにに鳴くの形にしてみる。鳴き声を自分の心情に利用している。

古今集十九 雑体 誹諧歌

一〇一一 梅の花見にこそ来つれうぐひすのひとくくと厭ひしををる

○ひとくくと鶯の声を擬声表現「ヒトクヒトク」と「人来、人来」を掛ける。

（『新日本古典文学全集』）

うぐひすと梅との伝統的に親密な関係を言つてゐるのであろう。その関係が人々に疎外されてゐる。うぐひすが人を厭つてゐるというわけであらう。

有名な話であるが、ほととぎすについて、「をかしと見ゆるほどに、ほととぎすをなめううたふ、聞くにぞ心憂き。

「ほととぎす、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、我は田植うれ」とうたふを聞くも……」

という枕草子の一文がある。これはほととぎすの声を何かに聞きなしたものでないが、鳥がなくて、それが心理的、

行動的なものを示唆している可能性は持っている。

『古典集成』

ころく 鳥の声。「子ろ来」「自来」などの意に聞きなしたものの。

『時代別国語大辞典 上代篇』

〔考〕この語が、相手の男性の来ることをあわせ表わしていることが、文脈から理解できるが、コに乙類仮名が用いられ、かつ男性をコロと呼ぶことはほかに例がない。そこで頃来説や、此ロ来説が生まれたが、いずれにも難点がある。やはり子ロ来とみるべきだろう。あるいは、鳥の鳴き声そのものはコロだけであつたかもしれない。と丁寧である。

とはいうものの、『全註』のように、

「児ろ来」は鳥の鳴き声であるから無理な言い方をしたものと云えよう。……全訳注は「児ろ来」に注して「鳥の鳴き声コロクに戯れた。君に児という点も戯笑か」と言っている。簡にして妙と言うべし。

と解釈してもいいのか。

七

まさでも来まさぬ君を

コロク（児ろ来）とぞ鳴く

の「君」は、例歌でみたように作者から離れていて、カラスの鳴き声に含まれたようにあるのか、あるいは作者の目

前にいるのか。

それは歌の場にかかっているのではないか。「君」と東歌で表現されるのは地方官のような人々であろうと書いたことがあった。

場を東国、国庁の宴などすると、作者と君は向き合っているのではないか。先に「宴吟詠」といった「言繁み君は来まさず」（二四九九）は現実を離れて利用されている。

三五二は作者の国庁の宴などへの登場の仕方、挨拶を歌っているのではないか。

「来まさぬ君」はそうした存在状態としての「君」、「兎ろ来」はそこに参上する作者の状態ではないか。

「来まさぬ君を」というのは呼びかけ、挨拶表現ではないか。

「来まさぬ君」は割合一般的な表現で、これを国庁などの宴席でとすれば、「君」は特定の一人よりは官人など複数を指しているよう。「来まさぬ君を」というより、遊女の所などへは「来まさぬ方々を」であろう。「を」の取り扱いが難しいが、それを君を兎ろくとそでは「君を」兎ろ、来」になってしまう。いやそれにしたって簡単には理解できない。

三四〇〇 信濃なる千曲の川の小石も君し踏みてば玉と拾はむ

では次元の異なるものを心的に統合している。「小石をも」へ玉と拾はむ」と

へ来まさぬ君を」へ兎ろ来とそ鳴く」

は例が違ふところがあろう。

三五八〇 君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ

では霧を息を思つて下さいで難しくはない。

「来まさぬ君を」は対象として歌に設定しているのではないか、そこで一旦止まり、それに対して「兎ろく」と続け、挨拶の歌としてゐるのではないか。

三四五七 内日さす宮の我が背は大和女の膝まくごとに我を忘らすな
は、官人の帰京を送る国府での送別歌であらう。

「宮の我が背」は『全註釈』のいうように「京から下つて来た役人」で今は帰京する官人をいうのであらう。『私注』に「ワガセという表現は、近親感を強くあらはすものであらうから、やはり東国人である夫が、上京した場合と見る方が自然であらう。」というのはもつともであるが、「官の我が背」という表現は官人にふさわしく、送別歌の遊行女婦などの媚態、その場に似た、慣れ親しみの表現であらう。

「膝まくごとに」も遊女の形式表現で、

膝まくゴトニ——我ヲシヌバセ

アラワスラスナ——ヒザハマクトモ

「といふべきなり」と『新考』がいうのも、官人を送る遊女の挨拶歌とすれば、それほど気にしなくてもよくなる。

竹敷の浦に船泊せし時に、各々心緒を陳べて作れる歌十八首

三七〇〇 右の一首は、大使

三七〇一 右の一首は、副使

三七〇二 右の一首は、大判官

三七〇三 右の一首は、小判官

三七〇四 黄葉の散らふ山辺ゆ漕ぐ船のにはひに愛でて出でて来にけり

三七〇五 竹敷の玉藻靡かし漕ぎ出なむ君が御船を何時とか待たむ

右の二首は、対馬の娘子名は玉槻

とある「玉槻」の登場の仕方に似ていると思われる。（にほひに愛でて）「出でて来にけり」という。「君」は官人（大使、副使、大判官、小判官）。

歌の形（状況）

筑波嶺の嶺ろに霞居過ぎかてに息づく君を率寝て遣らさね

という歌があつて、この歌は第三者といったものの存在が想定されている。

〈息づく君〉がいて、〈率寝て遣らさね〉と依頼されている女がいて、そう言っている作者がいるわけである。

多分、君は国府の官人、歌っているのは遊女、依頼されている形の女は、同僚の遊女であろう。宴のおひらき、解散の歌であろう。

対してこの三五二一の歌は挨拶の歌であろう。そこに「鳥とふ大をそ鳥」が利用された。鳥が利用されたのは「コロク」という鳴き声だけであろう。

鳥の鳴き声「コロク」と人の生活（歌の場）の「兎ろ来」の重層（複合）が人の生きている、歴史なのだろう。〈私たちの虚構がつづく限り、私たちは生きつづけだろう〉というのは歌が生きることになる。生きる虚構。

国庁の宴で鳥が取り入れられたり、うぐひすが男女の思いの中に現われたり、狭い、天皇制律令国家の心理に花鳥風月が定着したのであろう。

〈鳥という大ヲソ鳥〉は律令文化を基礎にしている。カラスという大量の群とその鳴き声は人の心を圧して、不安や恐怖を与えたことは事実であつたろう。今もカラスの鳴き声は凶事を知らせるものとして、人間にモノ日、コト日

を与えるものとして存在している。しかし〈軽率〉〈粗忽〉という意味は律令的生活環境でのマイナスイメージとしてある。

東国の一般農民の鳥の捉え方ではない。カラスのマイナスイメージが通用する所でこうした歌は表現される。説話というのにも高貴なものと同様なものの関係のように成立する。いつでも動物は精神性のないもの、非宗教性として存在した。

またカラスなどが在るとするのはこうした律令官人の宴の場でしかないであろう。

八

ここには、社会性によって負わされた〈カラス〉の陰湿性、凶性は現われていないようである。それは今、カラスが社会性、文化性、祝宴性の中に持ちこまれているせいであろう。

ともあれ、歌うということは何かを規制することであろうが、それが共同性となると（いえ、共同性でない歌などはなく）、歌は人間を外れる共同性（一般性）にしてしまふ。〈騙されるか、それとも滅びるか〉というのはシオランであるが、生きるというのは歌でも歌うことらしく、歌とはまた右様のもの。

歌は女が男の所に来る、男女の親密性を歌っているから、多分、そこでは異様なものが合理化、秩序化されて、それが〈歴史〉というものに一致した。